

勇魚 ISANA

Dec. 1998 No.19

目次

- 商業捕鯨再開と我が国の責務 . . . 1
中須勇雄
水産庁 長官
- ヌーチャノスと捕鯨 . . . 3
トム・メクサス・ハッピーヌク
世界捕鯨者会議 議長
- 新たな妖怪「環境主義」 . . . 8
今村 浩
早稲田大学社会科学部教授
- 何故、鯨肉を食べてはいけないのか？(その2) . . . 11
芳田誠一
農林共済基金 専務理事
ウーマンズ・フォーラム魚 会員
- 日本の伝統的食文化を見直そう . . . 16
真弓定夫
小児科医

ごあいさつ

商業捕鯨再開と我が国の責務 勇新丸竣工に寄せて

中須勇雄
水産庁 長官

四方を海に囲まれた我が国では有史以前から水産資源が利用されており、水産資源利用の歴史はまさに我が国の食文化の歴史であるといっても過言ではありません。その中で、鯨食文化も重要な役割を担ってきましたが、その鯨食文化が国際捕鯨委員会による商業捕鯨モラトリアムにより大幅に制限されることとなってから早10年が経ちました。

そもそも、この商業捕鯨モラトリアムは、資源の多少に関係なしに、全ての商業捕鯨を中止するという極めて合理性を欠いたものです。しかしながら、モラトリアム採択当時は、鯨類資源に関する科学的情報が極めて少なかったことから、信憑性のある資源情報が整うまで捕鯨活動を一旦中断すべきと考える国が大勢を占め、我が国も1988年にやむなく商業捕鯨を一時中断しました。

そのため、我が国は商業捕鯨モラトリアム受入れと同時に、鯨類資源について科学的情報を収集すべく目視調査や捕獲調査を開始しました。これらの調査で得られた情報により、鯨類の資源状況についての理解が年々深まっており、特に、我が国がモラトリアム受入れ前に主に捕獲していたミンク鯨の資源状況については南氷洋だけで76万頭以上の鯨が生息することが判明しており、商業捕鯨再開には何ら支障がない状況にあることが確認されております。

現在、鯨以外にも多くの水産資源の利用に対する締め付けが厳しさを増しています。その一方で、世界の人口は増加の一途をたどっており、2010年には70億人にも達することから、十分な食料供給の確保が危ぶまれ、食料資源としての水産資源の重要性が益々高まることが想定されております。

このような状況の中、限りある水産資源の有効利用を確保するためには、科学的情報に基づいた適切な資源管理の実施が必要不可欠となっています。そのため、最新鋭の船舶及び機材を用いた海洋生物資源調査の充実を、また、適切な資源管理施策により漁業秩序の維持を図っていくことが必須であり、そうすることが、商業捕鯨の早期再開への近道であるといえましようし、水産資源への依存度の高い我が国にとっての責務であるともいえましよう。

幸いにも本年 10 月、鯨類捕獲調査、漁業資源調査、さらには漁業取締まで幅広い活躍が期待される最新鋭のキャッチャーボート「勇新丸」が竣工しました。船名は、古来より鯨のことをいいならわした「勇魚」から「勇」の字を得て、さらに、新しい捕鯨時代の幕開けを祈念して命名されました。この勇新丸は竣工早々南氷洋における鯨類捕獲調査に従事することになると伺っております。その後は、科学的情報の収集及び漁業秩序の維持に向けた取締活動に従事することとなりますが、勇新丸の活躍により、一日も早く商業捕鯨の再開が達成され、我が国水産業の新時代の幕開けに大きく貢献することとなるよう祈念してやみません。

ヌーチャノスと捕鯨

トム・メクス・ハッピーヌク

世界捕鯨者会議 議長

太平洋北東部の捕鯨者たち

ヌーチャノスグループは、バンクーバー島西海岸の15の先住民族から成る。カナダと米国との国境線が引かれる前に、マカ先住民族はヌーチャノス先住民グループの一部であった。現在彼らは米国の一部に、そして我々はカナダに帰属するが、いまだ互いに緊密な関係をもっており、同族だと考えている。

日本人たちと同じく、ヌーチャノスとマカは、海に依存して生活をしてきたし、我々の住む地域に豊富にある資源を所有し、持続的に利用してきた。ヌーチャノスとマカは自然の資源を中心に生活している。捕鯨リーダーはすべて世襲制で、生れたときから、これらの資源を大切にするように育てられ、我々は、みずからが自然の一部であると考えてきた。

我々に与えられている多くの自然資源のなかで、クジラはもっとも重要なものだった。ヌーチャノスの捕鯨のリーダー達は、昔からザトウクジラ、コククジラ、マッコウクジラ、セミクジラ、シロナガスクジラ、ツチクジラを捕獲してきた。これらの壮大な哺乳動物は、神が我々に与えた最大の贈り物の一つとみなされ、捕鯨リーダーたちはクジラをそのように扱ってきた。

カナダと原住民捕鯨者

カナダの原住民には、我々ヌーチャノス、北極西部イヌイット、北極東部イヌイットなどがある。これらの人たちは、捕鯨を行う権利をもっており、それは、カナダ憲法によって保証されている。それは、カナダの捕鯨者が望めば、明日からでも捕鯨を行なえることを意味する。現在、北極圏のイヌイットはクジラを捕獲しており、ヌーチャノスも、近く捕鯨を再開する計画である。しかし、これらの捕鯨共同体が捕鯨をしようとする場合、カナダ漁業・海洋省から、捕獲許可の申請を求められる。我々にはこの手続きに従う義務はないが、自発的に申請を行って許可を得ている。最近、北極圏で協定交渉が行なわれ、合意が達成されたこと、また、ヌーチャノスも現在協定の交渉を進めている点は留意すべきことである。これらの協定に従って、恒久的に捕鯨を行なう権利が認められているのである。

マカはヌーチャノス先住民グループの一部であるが、1850年代に米国政

府と交渉を行い、協定を結んだ。彼らはこの条約の下で捕鯨を行なう権利をもち、これに従って、今秋から捕鯨を再開しようとしている。彼らは、国際捕鯨委員会（IWC）の許可を得る義務はないが、協力の精神から、それが最善策であると考えて許可を取得した。我々は彼らに喝采を送りたい。

伝統的な捕鯨漁具

かつて、ヌーチャノスとマカの捕鯨リーダーは、杉の木をくりぬいた、全長10～12メートルほどのカヌーで海に出ていた。カヌーは、8人乗りで、乗組員は、イチイの木を掘った独特の櫂を使った。この櫂は、クジラに向かって漕ぐときに、しなりはするが折れないように強く作られていた。鋸の柄はイチイの木で作られ、長さがおよそ5～6メートルほど、直径は21センチ。それは3つの部分からなり、桜の樹皮でつなげてある。この樹皮は自然のねじれをもっており、柄の各部を繋ぎあわせるのに適している。鋸の頭部は、矢じりの形に細工したイガいの貝殻でつくる。セイウチの内臓と蛤の貝殻の粉末とエゾマツの樹液を混ぜあわせて、矢じりをオオシカの角に固定する。この混合物は鋸の先端をセメントのように固め、強度を加える。その後、鋸の先端を柄に固定する。鋸の先端からは、セイウチの内臓の皮を切って編みあわせた7、8メートルの細綱が延びている、その後、杉の樹皮でつくったロープにこの細綱を取り付ける。このロープは、杉の樹皮の小切れを3、4本撚り合わせて作られる。最後に、アザラシの皮でつくった浮きを膨らませて、7～8メートルの間隔で杉の樹皮のロープに取り付ける。この浮きはクジラの動きを緩慢にさせるために使われる。

捕鯨漁具は、捕鯨者とクジラをつなぐもっとも重要な絆と考えられたため、人の目に触れるところには置かれなかった。捕鯨リーダー以外の人は捕鯨漁具に触ることはできなかったのである。この掟を守るために、捕鯨リーダーは、漁具を秘密の洞窟に保管するが、この掟を守らなかったために命を落とした者があったことを伝える物語や伝説がある。

準備

捕鯨リーダーの準備は、クジラが、バンクーヴァー島側に回遊してくる9ヶ月前から始まる。準備は、山の頂上から始まり、海で終わる。これには、断食、沐浴、祈禱、密儀、宗教儀礼などが含まれる。

捕鯨の準備は、太陰暦に従って、隠れた場所や洞窟、川の淵で行なわれる。その期間、リーダーは、ある食物を口にせず、数々の試練を経なければならな

い。こういった準備を適切におこなわない限り、狩猟に出かけることができなかった。リーダーたちは、特別な場所で、捕鯨カヌー用の杉の木や、銚の柄となるイチイの木、銚の先端部となるイガイの貝殻を集める。また、家族のための秘薬を集める場所もある。また、宗教的な歌、詠唱祈願、厄除けなども行う。共同体のために命をささげてくれたクジラの魂に対して適切な供養を行うためには、こういったしきたりはすべて必要であった。また、リーダーは、こういった準備作業を通して、超自然の力とつながりを獲得できると信じ、これらの掟を守ることによってのみ、伝統的な漁法と漁具を使って地上の最大の哺乳動物に打ち勝つことができた。

準備が終わると、捕鯨リーダーは、カヌーの乗り手とともに、秘密の洞窟から捕鯨漁具や捕鯨用カヌーを運び出し、海に運ぶ。捕鯨カヌーを海に浮かべる時や、捕獲後、陸に引き揚げる時には、カヌーを母なる大地に触れさせてはならない。これは、カヌーが水面を滑らかに滑るように、舟底や側面に特別な樹木のエキスを塗り込んでいるためである。捕鯨漁具、食糧、水をカヌーに積み込み、アザラシの皮の浮きを膨らませ、リーダーの歌にあわせて彼らは海に漕ぎ出す。

捕鯨リーダーと乗り手が村を出ると、リーダーの妻はきわめて重要な役割を果たすことになる。彼女は、山に顔を向けて杉のマットに横たわっていなければならない。このようにすることで、クジラが岸の方に引き寄せられると考えられていた。彼女は、また、特殊な石の上にカタツムリを乗せる。カタツムリが落ちれば、クジラが手におえず、じっとしていれば、安全な狩猟が行なわれるという。

捕 獲

カヌーは、クジラの左側から接近する。銚を投げるタイミングをリーダーに知らせるのは舵取りの役目である。銚を放つときには、クジラの頭と尾がともに水中にあることが重要だ。これはカヌーがクジラの尾の一撃を受けないようにするためである。これらの条件が整ったとき、舵取りはリーダーに大声で呼びかけ、リーダーの真後ろにいる漕ぎ手が、櫂の端でリーダーの脚の裏側を軽く叩く。これは、クジラを銚撃ちする合図である。銚が十分に深く貫通しなかった場合には、リーダーの後ろにいる、前方右席の漕手が銚の柄をつかんで、全身の力を込めてクジラに銚を突き刺す。その間、他の乗り手は、クジラの尾からカヌーを遠ざけるために逆方向に櫂を漕ぐ。クジラが潜ろうとするときに、アザラシ皮の浮きを結び付けた杉の樹皮で作ったロープを投げ込み、追尾が始

まる。クジラが疲労すると、狩猟者はイチイの木で作った2メートルほどの槍を使って、心臓と肺部に穴を開ける。クジラを仕留めた後、乗り手の一人が海中に潜り、骨で作ったナイフとセイウチの内臓で作った細縄を使ってクジラの口を縫いあわせる。これは、クジラが水を吸いすぎると、村まで曳いていくのが困難になるためである。潜水者の息が続かない場合には、先端を切り落とした筒状のケルプ（海草）を呼吸筒に使うが、これらの男たちのほとんどは、数分間は息をとめていることができ、水深数尋の深さまで潜ることができる。一行がクジラを曳いて村に帰ると、乗り手は細心の注意を払って、カヌーを岸に引き揚げ、もとの保管場所に戻す。また、リーダーは捕鯨漁具を秘密の洞穴にしまう。

その後、クジラの解体、配分の儀式が始まる。クジラは地域全体のものだが、ある部分は、各捕鯨リーダーのものとなるため、厳格に部族の法律に従い、解体、配分が行われる。配分が終わると、クジラの残りの部分が処理され、共同体全体で分かち合う。鯨皮はそのまま食用にされたり、薫製や乾燥食品または油にされる。鯨肉は、そのまま食べたり、いぶしたり、乾燥したりして保存する。骨は、道具や狩猟具の材料に使う。共同体が必要な分をとったのち、残りの部分は、販売、交換、取引用に保管される。

捕鯨の重要性

捕鯨は、販売、取引、交換のためのきわめて貴重な製品を我々に提供し、共同体の経済、構造を強めるという意味で重要である。それはいわば我々の中央銀行である。捕鯨は、その準備活動を通して、部族の法律、儀式、儀礼、祈りの歌、価値観、教訓、文化を強め維持してきた。捕鯨のリーダーは、数ヶ月にわたる沐浴、祈禱、断食などの規律正しい行動を通じて我々の精神生活を強め守ってきた。捕鯨は、同時に、太平洋北東部の地域全体の人々を団結させるという意味で他の共同体との関係を強めたし、しばしば部族間の付き合いや結婚につながる場合もあった。鯨の解体と祝祭にすべて人が参加することによって共同体内の関係が強まり、クジラが与える恵みを共有するところから家族間の関係も強まった。さらに捕鯨は、クジラのもつ栄養によって、我々を心身ともに強めたのである。

このように捕鯨は我々の生活の重要な一部となっている。我々の彫物細工、絵画、籠細工の絵模様をみれば、クジラが我々の生活に生命を吹き込み、影響を与えてきたことが歴然とするだろう。

世界中の捕鯨者の立場は皆同じである。それは、我々に食糧を与え、共同体

に恩恵をもたらし、我々の活動を維持するためにこそ資源が存在するという
ことである。

我々は、住民および共同体にたいして責任をもつだけでなく、資源そのもの
にたいしても責任を持っている。資源がなければ、我々は絶滅するだろうし、
それこそエコ・テロリストが望むところである。我々は、このような事態が起
こることを決して許してはならない。我々は、自然にたいして支配的立場にあ
るのではなく、自然の一部であることをいつも心に銘記すべきである。ヌーチ
ャノスとマカの捕鯨のリーダーが精神的な準備を行う理由はまさにここにある。
我々にその命を与えてくれたクジラを敬いながら、自然のバランスが確実に保
たれるようにしていかなければならない。これは、資源を大切にしながら持続
的に利用することによって可能となる。近代における資源管理の歴史を顧みれ
ば、今まで資源を乱獲していたかと思えば、次にはその利用を全く否定しよう
とする。そのようなやり方で自然のバランスが保たれるのだろうか。私の先祖
ははっきりと「ノー」というだろう。

新たな妖怪「環境主義」

今村 浩

早稲田大学社会科学部 教授

子供の頃から、何故か虎という動物が好きだった。別に飼ったことはないから（当たり前だが）、犬やハムスターが好きだというのは違う。多分、幼い頃に読んだバイコフの小説『偉大なる王（ワン）』の影響が大きいのだろう。今でも、虎が各地で絶滅の危機に瀕しているという話を聞くと、胸が痛む。あの気高い動物を絶滅の危機から救うために寄付をと言うなら、千円くらいは出しても良い。とまあ、以上は私の純粹に個人的な趣味である。

さて、以上のような趣味を持つ私が、仮に世界中の生物の保護を一元的に統括する地位（無論架空の地位だ）に就いたら、どうだろうか。何の調査もせず、全予算を虎の保護につき込み、ネコ科の肉食獣の捕獲を一切禁止したとしたら、それこそ公私混同の極みであり、どんな公職にも失格だろう。では、どう職務を果たすべきだろうか。

まず、あらゆる生物の保護は、「生物の多様性」が保たれることに価値があるという原則に依拠しているのだとしてみよう。これは、もう今ではお馴染みの論法だ。そこでは、あらゆる種は、その存在自体に価値があるのであって、かかる意味で等価でなければならない。原則として、絶滅させて良い種というのは無い筈だ。つまり、虎もナガスクジラもイルカも、そしてエイズ・ウィルスも、等しく生物の多様性に寄与している。しかし「生物の多様性」を標榜している環境主義者が、エイズ・ウィルス撲滅の研究を行なっている製薬会社の薬をボイコットしたという話は聞いたことがない。何故だろうか。それは多分、エイズ・ウィルスの生命活動によって、非常な苦痛を被る人間がいるからである。その限りでは、「生物の多様性」とは、人間の利益に従属する二次的価値であることになる。しかし、「非常な苦痛」とは、どの程度なのか。シマフクロウの保護政策のために、森林資源の利用ができない製材業者や、イルカに魚を食い荒らされる漁業者も、応接間に虎の毛皮を敷きたくてもできずにいる人も、「苦痛」を被っているのではないか。そうした苦痛を、客観的にランク付けする基準を考えるのは、かなり難しい。ただ、少なくとも生命の危険があるという点で、エイズ・ウィルスの患者が被る苦痛が、最も耐え難いとは言える。そこで、エイズ・ウィルスの保護区を作ることは見送ることにする。

では、製材業者と虎毛皮愛好家（？）ではどうだろう。後者の苦痛は、単に

趣味・嗜好の問題に過ぎず、前者の困難は生活がかかっているから、より深刻だと思ふのが普通である。しかし、そうではないとも考えられる。職業選択の自由があり、かつ一定の好況が保たれている状況の下では、製材業が好きだからやっているのだとも言える。とすれば、何も虎の毛皮を剥いで敷物にしなくたってと言うのと同じく、わざわざシマフクロウのいる森の木なんか切らなくてもいいだろうということにもなる。では虎と同じくシマフクロウの保護区を設定し、森林伐採を一切禁止すべきだろうか。保護によって人間が被る苦痛の比較から結論が出せないなら、別の基準を用いてみよう。つまり、虎と同じく、シマフクロウも絶滅の危機に瀕しているのか、だとしたらその原因は何かを調べてみる。

となると、生物学・生態学等の科学者の出番だ。科学的根拠のある結論を、尊重しなければならない。シマフクロウが、種として存続していける十分な個体数の生存のためには、まったく伐採を許さない森林の面積が、どれほど必要なのか。或いは、慎重に管理された伐採は、この鳥の生存に影響するのかどうか、科学的な調査研究を行なう。その結果に基づいて、森林の伐採規制を行なうことにする。ということはつまり、場合によっては森林の伐採は認めることになる。

では、鯨はどうか。例えば、南氷洋のミンククジラについて、国際捕鯨委員会（IWC）の科学小委員会は、100年間で20万頭捕獲しても資源量には何ら悪影響がないとの結論を出している。そうであれば、ミンククジラの適正量の捕獲は当然許されるべきだろう。

さて、私が、以上のような方針を採ったならば、公正で均衡のとれた生物保護政策だと誉めてもらえるだろうか。生憎、多くの「環境主義」者のお褒めには与れそうにない。最近の環境保護運動の哲学には、我々の想像を越えるものがある。極端な環境主義者の依拠する基本哲学のいくつかは、私のような時代遅れの近代主義者には、到底受け入れ難い代物である。その概要は次のようなものである。

- イ．人間には、他の生物よりも優先的な生存権はなく、あらゆる生物が平等である。
- ロ．現在世代は将来世代の生存に責任を負うべきであり、故に地球環境を現状のまま保全して将来世代に継承させなければならない。
- ハ．自立した個人ではなく、地球生態系自体が、決定の単位である。

これは、明らかに新しい全体主義と見なし得る。共産党宣言から150年後、

共産主義に変わる新たな抑圧的イデオロギーとしての「環境主義」が、その姿を現しつつあるように思われる。環境主義は、原則として自由であることが望ましいとされてきた様々の人間の営みを、地球環境保全という単一の基準で統制しようとする。それは、ある意味で究極の管理統制社会を目指している点で、かつての共産主義に通じる所がある。そして、地球環境保護の「大義」に目覚めた少数のエリートが、問題の深刻さを理解できない大衆を指導するというのも、似ていると思うのは、私の偏見だろうか。また、不寛容・独善・権威主義といった性質をも共有しているのではないか。

捕鯨を支持する人々を含む大多数の人々は、一般的な「環境主義」という主張には反対しないだろう。しかし、捕鯨の是非を含む個別の争点について、環境主義者と対峙するには、環境保護という俗受けする一般論を安易に受け入れてしまう前に、どのような基本理念に基づく環境保護が唱えられているのか、きちんと腑分けした上での対応が必要なのである。

何故、鯨肉を食べてはいけないのか？(その2)

“この食べ物は、……感謝して食べるようにと、
神がお造りになったものです”

テモテへの手紙 4章3節より

芳田誠一

農林共済基金 専務理事

ウーマンズ・フォーラム魚 会員

はじめに

前号(No. 18、'98年5月)で、新約聖書のパウロの書簡、ローマの信徒への手紙を引用し、「(鯨肉を)食べない人は、(鯨肉を)食べる人を裁いてはならない。」こと、逆に「(鯨肉を)食べる人は(鯨肉を)食べない人を軽蔑してはならない。」(カッコ内は筆者)ということが、捕鯨の是非を論じる上で、とても大切なことではないかと述べました。

馬肉食、ジビエ食或いは、ヒンズー教の牛への尊崇、ユダヤ教やイスラム教に於ける豚肉食の忌避等に、相共通する論理であり、倫理であることを示してきたつもりです。

今回も、もう少し多くの事例を示し、行論を敷衍して、鯨肉食については、食べる側も、食べない側も、お互いの趣味、嗜好、考え方、立場を尊重する(そこまでいなくても、せめて寛容の気持ちを持ち、相互不干渉を守る)ようになることを期待したいと思います。

その上に、初めて、冷静な、実際の、科学的根拠に基づく捕鯨論議が進展するのだから。

再び新約聖書の教えから

パウロの書簡の別な手紙、テモテへの手紙? の中では、食べるものについて、次のような記述があります。

「彼らは自分の良心に焼き印を押されており、……、ある種の食べ物を断つことを命じたりします。しかし、この食べ物は、信仰を持ち、真理を認識した人たちが感謝して食べるようにと、神がお造りになったものです。」(4章2・3節)とあり、これに引き続き、「というのは、神がお造りになったものはすべて良いものであり、感謝して受けるならば、何一つ捨てるものはないからです。」(同4節)とある。鯨肉は、この「神がお造りになった感謝して食べるべきも

の」ではないのでしょうか？

鯨肉のみが、他の動物と区別されて、これに含まれないと断定する根拠は全くありません。同じ新約聖書のなかの使徒言行録においては、食生活や食文化の差異が信仰の分裂をもたらさないようにとの配慮から、食習慣については、信者に重荷となるような規律、信者間にいさかいをもたらすようなタブーを設けることを禁じました。

「…次の必要な事柄以外、一切あなたがたに重荷を負わせないことに決めました。すなわち偶像に献げられたものと、血と、絞め殺した動物の肉と、みだらな行いとを避けることです。」(15章 28・29 節)

対象となる動物の肉には一切制限なく、殺し方のみが問題とされているのです。

あわれみの宗教キリスト教は、動物に苦痛を与えて殺すことは禁じましたが(それ以外の方法で安らかに殺し)、感謝しつつ食べるのなら、全て許容するのです。

敢えて指摘するならば、このような教えにもかかわらず血のソーセージを好んで食べる人々は欧州では、よく見たものです。筆者も賞味したことがあり、それなりにうまいものでした。

ここまでできているのに、未だ鯨肉食をタブーにしておくのでしょうか？

幾多の経験に学んだ叡智の結晶たるこの聖書の教えに、何故、従わないのでしょうか？

今一度、聖書に立ち返り、鯨肉食ひについては捕鯨に対する見解を、根源から見直して頂きたいものです。

前号にお示しした、家畜と鯨と、どちらが幸せな生涯を送ったと考えるだろうかという、動物の側からの視点と併せ、振り返って頂けると幸いです。

鯨は、ヨナを救った聖なる魚？

それでも或る人は言います。旧約聖書のヨナ書を読めば、鯨は、主に命じられ、「ヨナを救助し、命じられると、ヨナを陸地に吐き出す」(ヨナ書 2 章 10 節) 聖なる魚で、食べるなど、とんでもないと。

食べる食べないは個人の自由ですから、無理に食べるとは申しませんが、ヨナ書では、「鯨」という語は全く出てきません。ただ、「巨大な魚」とあるのみです。巨大な魚なら鯨という連想、或いはヨナの話に触発されたかもしれないピノキオの話から、何となく鯨と思い込んでしまっているようです。

しかし、例えば、荒俣宏著の「神聖自然学」(リプロポート社)収録の 18 世

紀ドイツバロック科学時代の挿し絵では、「巨大な魚」は、「サメ」として描かれており、必ずしも鯨はないのです。

どうぞ御安心の上、鯨肉を召し上がれ。とつい筆が滑りました。

ことが何であれ、嫌いなものは嫌いなもの、食べたくない人に、無理強いはいけませんね。

ローマの信徒への手紙（はじめに参照）の精神を忘れていました。ローマ人といえば、そうです。「ローマではローマ人のように振るまえ」=郷に入りて郷に従え、ということわざを思い出します。

この精神は、我々鯨食日本人には大切なことです。鯨肉食などを見るもいやという人々に、鯨肉食を見せつけたり、栄養価値を強調したりすることは、厳につつまみましょう。むしろ余計な反感を招くだけです。「食べる人は、食べない人を……」をもう一度思い出しましょう。

それでも捕鯨に反対？

前号も含め、これまで述べてきたようなことが、頭では全て納得できても、なお、鯨肉食反対従って捕鯨は一切反対という方がいらっしゃいます。これは、何に起因するのでしょうか？

テモテへの手紙（前出）の1節が手掛かりです。「…感謝して食べる」ことがなかったからです。

かつての欧米の捕鯨は、鯨から油脂を採る（時にペチコート用のひげ?!）ことのみを、目的としており、油脂に関係ない部分、油脂を採った残りは、利用せず、全て海に捨てて顧みなかったのです。「感謝して……」という行為もなく、それは、大殺りくとも言うべきものだったのです。皮のみが目的とされ、大量に狩られ、絶滅の危機にひんしたアメリカのバッファローの殺りくの形態と良く似ています。

これは、大きな罪であり、これが今なお心の中に強い罪の意識として残っているのではないのでしょうか？

この罪への強い呵責の念が働いて、反動的に強迫的な道徳心を持つに至るとするのは、よくあるケースで、心理学の文献にも、よく現れます。昔の罪への心理的補償の意識が鯨を殺すこと捕鯨の一切を、論理的、倫理的、科学的な根拠に拘らず、拒否しているのではないのでしょうか。

罪の意識そしてしょく罪の意識が強ければ強いだけ、より声高に、反捕鯨を叫ぶのでしょうか。

然し、それば免罪符のようなもので、本人の気持ちがすっきりしても、本当

に許されるものではありません。神の御心は（資源に問題がなければ）「感謝して食べる」ことは、良いことであるとし、そのために（絞め殺す以外の方法で）鯨を捕獲することを悪しきこととはしていないからです。

振り返って我が日本人の捕鯨は、どうだったのでしょうか？

一頭捕獲すれば、油脂は勿論、肉、内臓、皮に至るまで、全て食用に供し、その他の部分も殆ど全てとっていいくらい利用し尽くしたのです。「感謝して食べ」「（それを造った）神に感謝」してきたのです。

頂いた鯨の生命を、いとおしみ、あわれんで感謝しつつ、必要最小限の捕獲をしてきた我々日本人には、殺りくから反捕鯨という極端に走る必要性は全くありません。資源が回復すれば科学的根拠に基づく枠内の捕鯨は、当然許容されるべきものとなるわけです。

ロビションも同じようなことを

同じような感覚は、フランスの名シェフにもありました。有名三ツ星レストランのシェフ、ロビションは、こう言ったそうです。（山本益博著プロフェSSIONナルの本領・新潮社より）

「忘れられてはならないのは素材の生命です。牛や豚や鳥や 1 枚の葉っぱに至るまでその生命を断つことと引き換えに、その志を頂くのですから、料理がお客様の口に入るまで、素材に対する尊敬の念を持ち続けなければならない。それは、もう、一つの信仰と言って良いでしょう。

必要最小限の生命を断ち、感謝しながら食べさせて頂く、こういうモラルが守り続けられる限り、殺される動物も、従容とし死につくのではないのでしょうか。鯨についても、ことは、全く同様ではないのでしょうか。

おわりに

オリンピック方式による乱獲等日本が反省すべきことも多々あるとは思いますが、その反省の上に立ち、色々努力した結果、資源は回復してきたわけです。この回復した資源のみを、色々引用してきたものに共通の「苦痛を与えない方法で殺し、感謝の気持ちを有しつつ食べる」という原則を守りつつ、持続的に利用していきたいというのが我々日本人の願いです。

このようなささやかな望みが、過去の罪の意識への過剰反応から否定されるというのは残念なことです。

今一度、聖書の教えの原点に立ち返り、それぞれの食文化を尊重し合おうではありませんか。

他の生命を断ち、それを食して、人の生命が維持されている以上、その断たれた生命へのあわれみと感謝の気持ち以外には、良い殺生と悪い殺生を区別する基準は、何もありません。鯨肉食そして捕鯨について、今一度根源から見直してみたいと、繰り返して筆を擱きます。

日本の伝統的食文化を見直そう

真弓定夫

小児科医

私が小児科医になって40年あまりの歳月が過ぎ去っていきました。その間、日本人の体格は明らかに大きくなりましたが、その反面体質は劣化しています。その結果、かつてあまりみられなかったアレルギー - 性疾患（気管支喘息、アトピー - 性皮膚炎、滲出性中耳炎等）、生活習慣病（癌、脳血管障害、心臓病、糖尿病など）が急増し、しかも低年齢化しています。心の偏りに起因する異状行動、犯罪も深刻化しています。

こうした原因はどこにあるのでしょうか。私は、日本伝統の優れた文化に基づく生活習慣が大きく変革したことに起因するものと考えています。そのうち、食文化、とくに動物性食品に的を絞って考えてみたいと思います。

かつての日本食は、ヒト本来の食の原点である穀類（ごはん、うどんなど）野菜、海藻、果物などを基本とし、動物性食品は、陸では小鳥や小動物、海では小魚、鯨などによって健康を保持してきました。それが、終戦後、大きく歪められて欧米化の一途を辿ってきました。これに歯止めをかけるためには食の原点をしっかりと捉えておかねばなりません。

ヒトはほ乳動物に属しています。四千種を超えるほ乳動物は、すべて「温血、胎生、雌は乳を分泌して仔を保育する」動物です。しかも、赤ちゃんの体にはお母さんの乳の成分である乳糖を分解する乳糖分解酵素（ラクタ - ゼ）があり、それによって母乳を栄養源として活用して成長します。そして、断乳とともにラクタ - ゼは激減し、乳を利用できない身体になっていきます。この自然の掟に反した唯一の動物が最近の文明人なのです。

そもそも、ヒトはゴリラ、オランウ - タン、チンパンジ - 、日本猿などとともに霊長類に属しています。霊長類はすべて温帯から熱帯にかけて発生し、そこでとれる前述のような食べ物をとり続けてきました。

ヒト以外の霊長類はいまでも発生当初と同じ生活圏で生活しています。しかし、ヒトは火を使いだし、住居に入ることによって生活圏が寒帯にも広がっていきました。気候が寒冷で水が少なく、農耕に適さない場所では、自然と蓄肉や牛乳、乳製品などに動物性蛋白を求め、肉食中心の食生活をするようになりました。それが北ヨ - ロッパ、北アメリカの人たちです。

一方、アジア・モンスーン地域では、その温暖な気候と恵まれた水を利用して農耕が発達し、特に四方を海に囲まれた日本では、魚や鯨など海の幸に動物性蛋白を求める食文化が育まれてきました。

このように、人は自然にそれぞれの住む地域の気候や風土に合わせた食文化を形成してきたのです。「身土不二」という言葉がありますが、それぞれの土地にあった食べ物を摂ることが大切であり、健康にも良いのです。さらに理想をいえば、食べ物は、自分自身で捉えてそれを食卓に供することが原点であり、空腹時に必要最低限のものをもって食べる、つまり、健康を保つ上ではうっすらと飢えた状態が最良なのです。

日本人の食生活は、終戦後、米軍の占領期間を通じて急速に欧米化し、米や野菜、魚などを中心とするものから、小麦や畜産・酪農品を主体とするものへと変化していきました。

前に述べたような数々の病気の急増は、こういった食生活の変化に起因しています。

体の健康を考えたとき、日本は、いまこそ、その風土に合った、優れた米、魚を主体にした伝統食文化を見直すべきだと思います。

私どもはごく当たり前に地球という言葉を使っていますが、海が主体となって構成されているこの惑星は、冷静に考えれば水球と呼ぶべきではないでしょうか。したがって、ヒトの動物性食料源は魚介類や鯨など海に依存していくことはきわめて望ましい姿だと思います。かつての日本人は、そうした意味で動物性資源に関しては特に恵まれていたといえるのです。

「食は命なり」といいます。巷間いわれる「医食同源」も実は「食医同源」。医よりも食の方が大切なのです。

今一度、食生活を見直して、わずか50年前までは我々日本人の主たる蛋白源であった海の幸で食卓を飾るように心がけていただきたいものです。